

# 子ども同士がお互いの個性を認め合い・支え合うことができる学級づくり

## — 認め合い活動を取り入れた道徳教育を通して—

教職実践基礎領域  
鈴木 義顕

### I はじめに

連携協力校である小学校にて、約1年4カ月の期間にサポーター活動と、1カ月の教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを行った。教師力向上実習Ⅰ・Ⅱともに同じ学級で行うことで、教師に必要な資質や学級経営や授業づくりについて学ぶことができた。

本稿では、教師力向上実習Ⅰで実践した「子ども一人一人が自分の良さに気づくことができる学級づくり」と、教師力向上実習Ⅱで実践した「子ども同士がお互いを認め合える授業づくり」をテーマとして、取り組んだ成果と課題を報告する。

### II 研究主題設定の理由

#### 1 今日的な教育課題

今日、グローバル化により異なる文化や文明の共存の必要性が増している。そのため、豊かな心や健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが重要になっている。文部科学省は平成20年1月に「幼稚園、小学校、中学校の学習指導要領等の改善について」答申を行った。その中に「自分への自信の欠如」や「自らの将来への不安」など、自分自身に対して自信をもつことができず、将来の生活に見通しをもつことができていない子どもの増加が課題であるとされた。

上記の課題を踏まえ、学習指導要領改訂では、『『生きる力』という理念の共有』や『豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実』などを具体的な考え方として、学習指導要領の改善の方向性が示された。

#### 2 学習指導要領

『小学校学習指導要領解説 道徳編』では、「生きる力」を人と調和しつつ自律的に社会生活を送ることができるようになるために必要な、人間として実践的な力であり、豊かな人間性を重要な要素として位置付けている。豊かな人間性とは、生命を大切に、人権を尊重する心、他人を思いやる心や他者との共生を大切にする心であるととらえる。こうした心を育成することが心の教育であり、それらの教育の基盤となるのが道徳教育である。

現在、子どもの規範意識の希薄化や学習や将来に対して無気力であったり不安を感じている子どももいる。しかし、そうした不安から逃避し、自己の考えに閉じこもりがち子どももいる。

心の教育を進めていくためには、子どもたちが他者や社会、自然などと豊かなかかわりの中で生きるという実感や達成感を深めることで自信を育ませることが重要である。

他者とのかかわりを通して、心の教育を進める場合には他者との人間関係能力を高めることが大切になってくる。人間関係能力を育てるために大切なことは3つある。

・一つ目は『自由な雰囲気であること』である。この場合の自由とは人格の自由を尊重することであり、自由を尊重するということは、児童一人一人がそれぞれ人格の完成を目指して努力する、その個性的な発展を認め合い、尊重するということである。

・二つ目は、『寛容であること』である。広いころをもつて、自分とは異なる意見や立場を尊重するとともに過ちや失敗を許すことができるようにする。子ども同士が互いに失敗を許し合う中から、言動を振り返り、相手へ配慮ある言葉かけができると考える。

・三つ目は、『支え合うこと』である。児童にとって、仲間とともに力を合わせて課題や問題に取り組むことや一つの目標を達成する喜びを共有することは大切なことである。

以上のような人間関係能力の形成を道徳の授業内で進めていくためには、自分の良さについて気づくことができる時間を設けること、友だちの良さにも気づかせ、発表できる場を設けることが大切である。そして、自分の良さを集団の中で生かすことができる場を設けることが重要である。

#### 3 連携協力校の児童の実態

学校全体は、落ち着いており、目立ったトラブルは少ない。男女の仲も良く、行事がある際には、学校の一員としてみんなのために役に立つことへのやりがいを見出す児童もいた。また、自分の仕事に対して責任をもって取り組むことができ、自ら率先して動くとする意識が高い。しかし、意識を高めることができなくても実際に行動に移すことができない児童もいる。他者の目を意識してしまい、自分に自信をもつことができない児童もいる。また、他者が自分をどのように見ているのか不安に思い、他者から認められていると実感をもつことができていない児童が少なく感じた。

以上のような実態から、他者から認められている

実感をもつことができていること、それが原因で自分に自信をもつことができず積極的に行動することができないという課題を見つけた。

#### 4 目指す児童像

今日的な教育課題と連携協力校との実態を踏まえ、本研究で目指す児童像を以下に設定した。

自分の良さに気づき、他者と他者の考えを認めることができ、自分に自信をもつことができる児童

目指す児童像に迫るため、他者から認められる場を設け、児童の自己肯定感を高める活動を取り入れた道徳の実践と自分の考えを明確にもち、相手の意見も尊重することで所属意識を高める活動を取り入れたジレンマ教育の実践を行う、以上の二点を中心とした実習を行った。

### III 理論研究

#### 1 個性

個性について、学習指導要領では個人特有の特徴や性格であると言われている。個性の伸長は、自分のよさを生かし更にそれを伸ばし、自分らしさを発揮しながら調和のとれた自己を形成していくことであると定義している。

また、ルソー (Rousseau, J-J.) によれば、人間が本来持っている自然の性質を指している。他の人と違うものや変わっていることを意味しているのではなく、個々人がそもそも自分の身体のなかに抱えている自然を指している。学校現場で個性を考えていった場合、人と違うところが挙げられるが、他の人と比べてどう違うのかということは問題ではない。子ども一人一人がもつ自然がどうあるのが個性の中身として重要になってくる。

また、青木(1990)は自分の個性を自覚するのは、親や先生の教示、第三者の評価などによって、その機会が与えられる場合。または、友人と比べたり、同輩の人たちを思い浮かべて、そこに平均基準を考え、この水準に照らして自己の特質を評価する場合であると述べている。個性の伸長を図る際に、その人の特徴や長所を育成することが個性の伸長につながるということである。つまり個性とは、

1. その人がもっている特徴や性格など、自然性のもの
2. その個性を自覚させるためには、第三者の存在が必要であること
3. 特徴や長所を育成することが個性の伸長であること

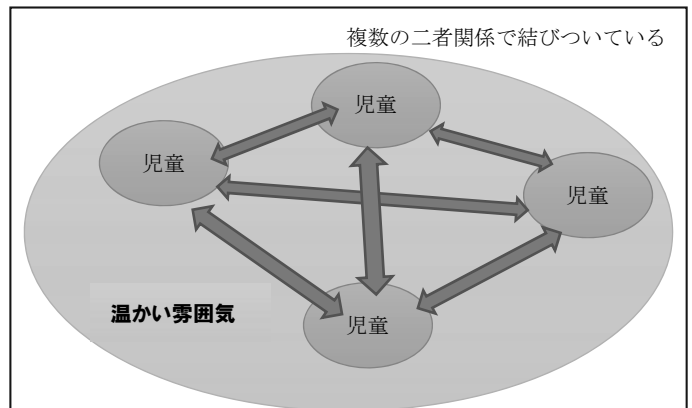
と捉えて、私は他のなによりもかけがえのない自分の尊厳があることを他者の目を通して認識させ、自分の特徴や長所を育成させることで自分と他者の個

性を大切に子どもを育てることにつながってくると考える。

#### 2 認め合える学級

認め合える学級について松澤(2012)は、主体的に自他を肯定的にとらえようとする意識「自他肯定思考」を全員がもっていること。さらに、同じ目標に向かって全員で頑張っている雰囲気のある学級を「自他ともに認め合い、高め合える学級」であると定義している。つまり、自分には得意なことや苦手なことがあっても良い。それを学級の中で生かして、学級に必要な人間であると自己を肯定する。また、友だちにはがんばっている部分がある。だから、いやなところも含めてその人なんだと他者を肯定することができる学級である。さらに、自分の意見が否定されるのではなく、肯定されている実感をもち安心して自分の意見を伝えることができる学級である。

また、松澤(2012)は自分や友だちの良さだけではなく、欠点も知ったうえで肯定的にとらえることができるような二者関係を基盤として、一人の子どもが複数の二者関係で結びついている人間関係を「よりよい人間関係」として定義づけた。この人間関係は、お互いを信頼し、支え合うことができる関係である。



【資料1】よりよい人間関係

そこで、認め合える学級を築いていくため、互いの良いところを発表する場の設定やジレンマ教育による意見交流を行っていく。また、良いところ発表では、発見する相手を替えることで、一人の児童が複数の児童と人間関係を築くことができると考える。また、グループ活動を取り入れることで小集団での関係づくりを行っていく。個から集団での関係づくりを行うことで、認め合える学級を築くことができると考える。

#### IV 特別な教科 道徳

学習指導要領「特別な教科 道徳」は今までの学習指導要領を改訂しており、特に内容のB項目(主として人との関わりに関すること)の第5学年及び第6学年(ウ)では、『自らの考えをもって他の立

場や考えを受け入れることを重視して「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに」を加え、「自分と異なる意見や立場を大切にする」を自分と異なる意見や立場を尊重する』に改めている。従来の学習指導要領では、相手の考えなどを大切にすることに重点が置かれていた。しかし、「特別な教科 道徳」では、自分の考えや意見をもつことを重視している。さらに、それらをもつたうえで異なる意見や立場を尊重することを大切にしている。

連携協力校の児童は自分の考えをもつことができる子やもつことができていない子がそれぞれいた。また、自分の考えをもつことができていない子も友だちと違った考えを積極的に伝えることが不十分で、友だちの考えに合わせようとしてしまう。友だちと違った意見をもつことについてどう思っているのかを聞くと、「友だちと違うのは怖いけど、違ってもいいと思う」や「自分の意見はしっかりと伝えたい」という意見が返ってきた。児童に自分の立場や考えを明確にもたせ、他人の意見や考えを交流する場を設定することで学習指導要領の「自分と異なる意見や立場を尊重する」心を育むことができると考えた。

個性を認め合い支え合うとは「自分の個性について理解しており、さらにその個性を伸ばしていこうとする姿」、「他者の個性について理解、尊重しようとする姿」と捉えた。以上のことが、児童が自分や他者の個性を大切に、尊重することに必要な資質であると考えた。

## V 研究内容

### 1 研究の仮説

道徳の授業において、自分の心情を投影することができる教材を活用して自分に自信をもつことができるようになり、他者の考えを聞く場の設定することにより、互いを認め合うことができるようになれば、互いが個性を認め合い・支え合うことができる学級集団となるだろう。

### 2 研究の手立て

#### (1) 認め合い活動を取り入れた道徳教育

子どもがお互いの個性を認め合うためには、他者と他者の考えを認められるようになる必要があると考える。しかし、他者を認めるためには自分自身も他者から認められている実感を持ち、自己肯定感と所属意識が高まっている必要があると考える。そこで、自己肯定感を高めるために、自分自身のよいところを自分自身の視点と他人からの視点を通して気づくことができる「絵本や物語文」を題材としていく。そして、自分の良いところについて考える時間を設ける。その後、友だちからさらに自分の良いところを教えてもらうことで自己肯定感をさらに高めていく。また、友だちの良いところを探す活動を通

して、お互いの良いところを理解できるようにしていく。次に、児童の所属意識を高めるために、自分の考えが友だちから認められており、自分も認めている実感をもつことが必要だと考えた。そこで、自分の意見を友だちにただ伝えるだけではなく、友だちの意見を受け入れ、そのうえで自分の考えをもてるようにしていく。

### 3 研究の方法

#### (1) 絵本や物語文を使った教材の工夫

連携協力校は前年度に『主体的な学びを続ける子の育成』をテーマに授業研究に努めている。主体的な学びを続ける子どもの育成には、伝える基礎である言葉の力を育むことに焦点を当て、自分の考えをグループや学級全体で互いに交流することを大切にしている。そのため、物語教材を中心とした授業づくりに力を入れている。そこで、前年度行われていた内容を生かし、絵本や物語文を使った授業を行っていく。

指導の前半に取り上げる資料『ぼくのニセモノをつくるには』という絵本には、宿題やお掃除をせず、楽をして過ごしていきたいというけんたが自分のコピーロボットをつくり、そのロボットに自分の情報を伝えていく話である。児童に自分のコピーロボットをつくるに必要なことを考えさせ、自分たちの特徴を考えさせるようにしていく。また、二宮金次郎の幼少期のエピソードを教材に取り上げ、二宮金次郎の気持ちを考え、自分の考えを話し合いながら、他者の喜びを自分の喜びとして生きることのすばらしさを感じさせたい。そして、学級のために自分のできることを考え、どのようなことをしたいのかを考えさせた。

指導の後半では、物語文『すれちがい』では、よし子とえり子の二人が同じ出来事を自分本位の立場から書いた作文であり、それぞれの立場に立って考えることの大切さについて考えさせるようにしていく。『最後のクラブ決め』、『重なった県大会』の教材では、大切なことが重なってしまい、どちらか一方を選ばなければならない。最後には自分で考えて選択し、行動することの大切さを考えさせるようにしていく。

以上のように、絵本や物語文を教材として扱っていくことで、それらの登場人物を通して、自己の心情を表現することができ、児童に道徳的価値について考えさせることができると考えた。

#### (2) 他者の考えを聞く場の設定

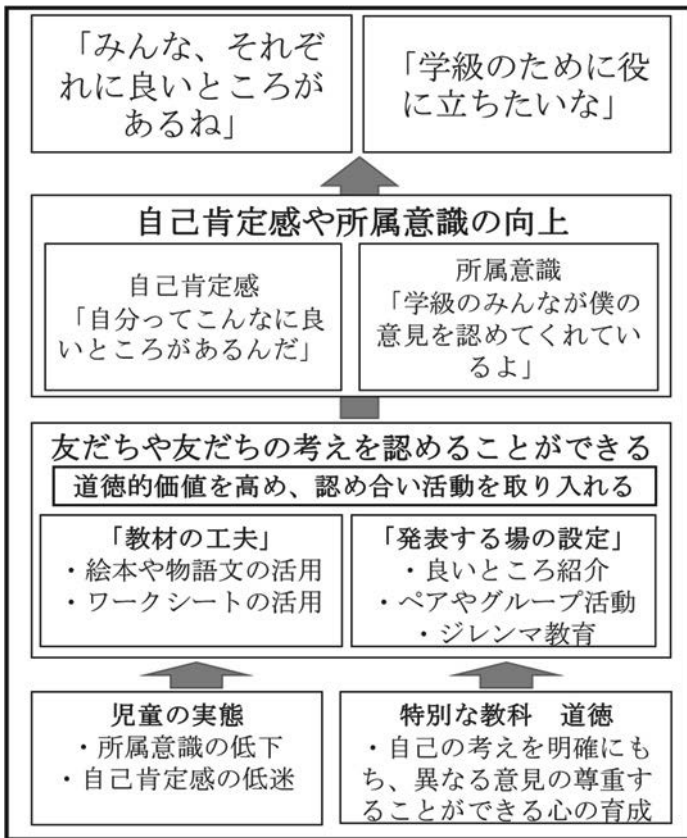
自分の良いところについて気づく段階では、児童たちは自分の良いところについてなかなか考えることができなかった。そこで、他者から教えてもらうことで自分にはどのような良いところがあるのかを明確にすることができると考えた。また、他者から

教えてもらい、気づくことで児童の自信をより高めることができると考えた。良いところを教えてもらう場合、教えてもらう人数が多ければ多いほど児童の自己肯定感を高めることができると考えるため、良いところ発表を行う際には、ペア活動、グループ活動、学級活動などを取り入れる。

他者の意見や考えを認める段階では、自分の意見と他者の意見を交流できる場を設定することが大切であると考えた。そのため、ジレンマ教育を行っていくことで相手の意見を認める態度を育てていくことができると考えた。ジレンマ教育を行っていく際には、児童に自分の考えを明確にもたせるようにしていく。そうしたうえで、他者の考えと自分の考えを比較できるようにすることが大切である。

以上のように、他者の考えを聞く場を設定することで、自分の良いところに気づき自信をもつことができ、他者や他者の考えを認めることもできると考えた。

#### 4 研究構想図



#### VI 教師力向上実習Ⅰ、Ⅱにおける実践

調査対象：連携協力校 第6学年 24名  
 実施期間：2015年5月  
 実践授業：道徳 全6時間完了

##### 1 教師力向上実習Ⅰ、Ⅱのテーマ

実習Ⅰ「子ども一人一人が自分のよさに気づくことができる学級づくりー絵本や物語教材を活用してー」  
 実習Ⅱ「子ども同士が互いを認め合える授業づくり

一人の思いを受け止めたジレンマ教育を活用した道徳の授業を通してー」

#### 2 指導構想

時間	教材名	目標
1時間目	絵本 「ぼくのニセモノをつくるには」 『ブロンズ新社』より ヨシタケシンスケ著	絵本を読んで、自分についての理解を深める。
2時間目	絵本 「ぼくのニセモノをつくるには」	友だちから自分の良いところを見つけてもらい、さらに自分についての理解を深める。
3時間目	物語文 「二宮金次郎」 『道徳自作資料&指導案No.3』 沼田洋子著	物語文を読んで、自分のできることを集団の中で役立たせようとする気持ちを高める。
4時間目	物語文 「すれちがい」 『明るい心』より	物語文を読んで、相手の立場や考えを尊重し、自分とは異なる意見に対して広い心をもてるようにする。
5時間目	物語文 「クラブ決め」 『モラルジレンマ教材 である白熱討論の道徳授業=小学校編』より 荒木紀幸著	物語文を読んで、自分の考えをもち、相手の意見を認めようとする気持ちを高める。
6時間目	物語文 「重なった県大会」 『資料を生かしたジレンマ授業の方法』より	物語文を読んで、自分の考えをもち、相手の意見を認めようとする気持ちを高める。

#### 3 児童の実態

実習Ⅰ、Ⅱを行う前と後に学級への満足度に対するアンケートを実施し、児童の実態を把握した上で実習計画と手立てを構想した。

#### 4 本実習の手立て

児童の実態から、方法(1)・(2)を取り入れた指導方法を構想し、実習を行った。

#### 5 抽出児童(児童A)

事前のアンケート調査では、「運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味でクラスの人からあまり認められていない」と答えている。学級での様子を観察していると、自分から友だちに話しかけることは少ない。また、授業では自分から手を挙げて発言することはあまりなく、班での話し合い活動にも参加することが苦手であると感じた。

自分や友だちの個性について理解を深め、自分が友だちから認められているという実感をもてるようになってほしい。また、友だちから認められるだけでなく、自分も友だちを認めることの大切さを感じ、学級の一員としての所属意識をもって学校生活を送ってほしいと願った。

#### 6 実習の検証方法

##### (1) 抽出児童の授業中の様子

絵本や物語教材を活用した授業や認め合い活動を行っている抽出児童の発言内容や様子を観察して、

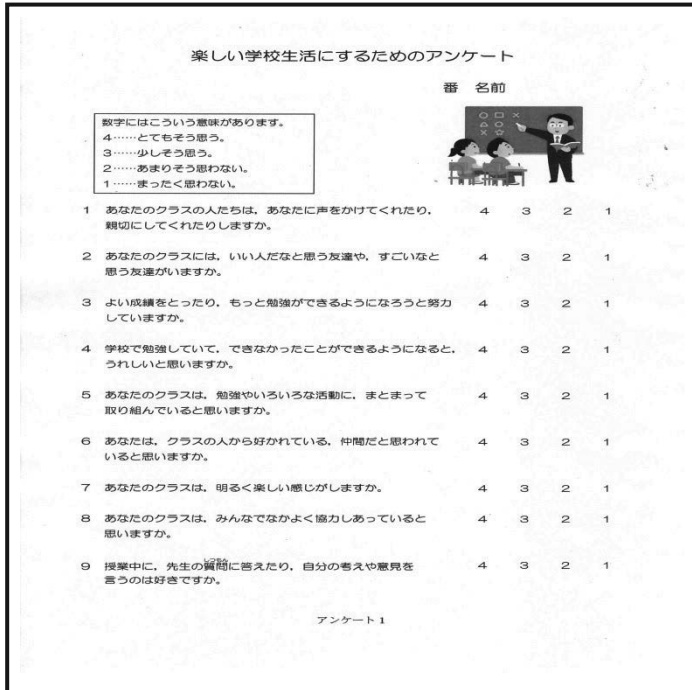
手立てが有効であったのかを検証する。

### (2) 学習シートの内容

第1～6時の学習シートの内容や感想から、手立てが有効であったのかを検証する。

### (3) アンケートの変容

実習前後に、『河村茂雄の楽しい学校生活を送るためのアンケート』を基にしたアンケートを用いて調査する【資料2】。数値の変化から手立てが有効であったのかを検証する。



【資料2】実習I, IIで用いたアンケート

## 7 授業の実際と抽出児の様子及び検証

### (1) 絵本を使った教材に興味を示し、自分について振り返る児童A(第1時)

授業の初めに本の紹介として、絵本を出した。す

ると、「絵本を使うの」という声があがった。コピーロボットを作るために必要な要素について質問した。すると、「心が必要」や「体がそっくりのほうがいい」という答えが返ってきた。そこで、自分のコピーロボットを作るため、自分の『好きなこと、きれいなこと』と自分に『できること、できないこと』を考えた。自分の『好きなこと、きれいなこと』についてはたくさん書くことができたが、『できること、できないこと』についてはなかなか書くことができなかった。児童Aも『できること』よりも『できないこと』の方がたくさん書いていた。

次に学習シートを隣同士で交換をして、友だちが書いた内容に【なるほど】と思ったら○を書き、まだ書くことがあるならば隣に書き足すようにした。学習シートを見ていると、『好きなこと』や『できること』に○を書いている児童が多かった。児童Aも『できないこと』をたくさん書いていたが、『好きなこと』や『できること』にたくさん○が書かれていた。

学習シートを記入している様子や「絵本がおもしろかった」、「自分で思っていることと他の友達が思っていることって大分似ているんだな」と思った」という感想内容からも絵本を使った授業に興味を抱いていたと感じた【資料3】。



【資料3】学習シート①

### (2) 他人から良いところを教えてもらい、自分の良いところに気づく児童A(第2時)

前回の授業の感想を発表してから、今度は友だち

のコピーロボットをつくる活動を行った。友だちのコピーロボットを作るために『良いところとありがとうと言いたいこと』を考えた。まず、隣同士で交換して考えていた。それから、グループになり『良いところとありがとうと言いたいこと』を教えた。グループの一人が記録係として他の児童が言った内容を学習シートに記入した。グループで友だちの良いところを伝え合っているとき、楽しそうにしていた。また、教えてもらっている児童はうれしそうな表情をしていた。グループでの発表を終えてから、学級内で学習シートを交換して、さらに『良いところ』と『ありがとうと言いたいこと』を書いた。

児童 A は自分の『良いところ』にたくさん書かれたのを見て、うれしそうにしていた。授業の感想にもそのことが書かれていた。また、自分や他人が考えていることは案外似ているということも実感したようであった。児童 A は第 1 時では自分について良い部分はあまり書くことができなかったが、今回の授業を通して、自分の『良いところ』について理解を深めることができたようであった【資料 4】。

友だちのコピーロボットをつくらう



授業の感想

最後自分のところに回ってきたときたくさん良いところが書いてあってうれしかった。号車で回しているときも、たくさんその子の良いところが写ったけどかかっているものはかりで、みんなもこう思っているんだな、と思った。できるできないのときも同じ考えていることはだいたい一緒なんだなと思った。おもしいかたか、またやりたい。

【資料 4】学習シート②

(3) 二宮金次郎の生き方を通して、学級のためにできることについて考える児童 A (第 3 時)

物語資料『二宮金次郎』を用いて授業を行った。そこで、授業の初めに連携協力校にある二宮金次郎像の写真を提示した。すると、「見たことある」や「この人知っている」などと興味を示していた。大人と同じように仕事ができないときや仕事の代わりにわらじをそっと置いているときの二宮金次郎の気持ちを考えた。学習シートの記述に「人の役に立つ仕事をやっていきたいと思いました」や「自分でできる

仕事を探し、自分からその仕事に取り組めるようにがんばっていきたい」など集団のために自分にできることをしようとする意欲を高めることができた。そして、二宮金次郎の気持ちを通して、自分が人のためにどのようなことができるのかを考えることができていたようであった。

実践学級の児童は発言するのが苦手な児童が多い。しかし、この授業では児童全員が発言することができた。少しずつ自分に自信をもつことができる児童が増えてきたため、発言を怖がるものが減ったのだと考える。児童 A もこの授業から発言することができた【資料 5】。

わらじをそっとおいている時の二宮金次郎の気持ちを考える場面では、「みんなの役に立てればいいなあ」と記述しており、人の役に立つことの大切さを理解しているようであった。

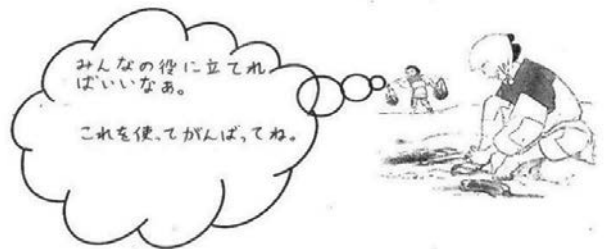
T : みんなから感謝されているとき、金次郎はどんな気持ちかな？  
 児童 A : うーん。(少し困る表情)  
 T : 言えそうかな？  
 児童 A : やっと大人に追いつくことができてうれしい。  
 T : そっか、追いつくことができてうれしいんだね。

【資料 5】授業記録①

また、児童 A の学習シートの感想では、「金次郎さんを参考にして、あきらめない心・思いやりの心を大切にしていこうと思います」と記述していた【資料 6】。授業を通して、自分のできないことを見つめるのではなく、できることをあきらめず見つけ、行動することの大切さを感じることもできたと考えられる。

～わらじをつくった二宮金次郎～

わらじをそっとおいている時、金次郎はどんな気持ちかな。



授業の感想 (授業で思ったことや感じたことを自由に書こう。)

私はわらじをつくった金次郎さんを見て、色々なことを感じました。まずはじめに感じたことは、この人はすごいんだなと思いました。まだ子供なのに、大人のお手伝いをしていてすごいなと思いました。あんな人があんなに金次郎さんが出来るようになったけど、あいつけないはずなのに、しょうけんもいって、最後にわらじをつくって自分もあいつけました。この金次郎さんの話を聞いて、あきらめない心は大切だなと改めて感じました。人を想うおもいやりの心も大切だと思いました。これから金次郎さんをも参考に、あきらめない心・おもいやりの心を大切にしていこうと思います。

【資料 6】学習シート③

(4) 友だちの意見を大切にしようとする児童 A (第 4 時)

物語資料『すれちがい』を用いて授業を行った。『すれちがい』という物語は二人の女の子のそれぞれの視点で進んでいく。児童により相手の立場に立って考えることの大切さを実感させるため、学級を二つのグループに分け、半分の児童には一人の女の子のみの日記、もう半分の児童にはもう一方の女の子の日記を配布する。一方の事情しか知らないことで、それぞれの気持ちに共感できるように工夫した。

一方の事情しか知らず、それぞれの女の子の気持ちを発表すると、友だちが自分の知らないことを発表しているため、児童たちは困惑していった。ある程度意見が出た段階で、日記は二つあることを伝えた。すると、児童たちから「なんだ、そういうことだったんだ」や「そういうことを知ってたら、別のことを思ったのに」という声が聞こえてきた。

児童 A も一方だけの日記を読んだときには、相手のことを考えることができず、自分本位な気持ちで考えていた。しかし、両方の日記を読むことで相手の立場を思いやる気持ちについて考えることができたと感じた。学習シートの感想にも「相手をもっと思うことを大切にしていきたい」という記述があった。また、「B 君と C 君の意見で、すれちがいを感じた」や「D 君が言った通り、、、」など友だちの意見を大切にしようとする記述があった。自分の考えを大切にするだけでなく、他者の意見も大切にしようとする気持ちが高まってきていると感じた【資料 7】。

～すれちがい～

ピアノのけいこでえり子と会ったとき、よし子さんがどんな気持ちかを書こう。



なんで、時間通)にまよあわせ場所にまよくなれたの？  
なりましたのに...

二人にアドバイスをしよう。

<よし子> もう少しえり子の話をきいてあげればよかったです。  
<えり子> よし子さんにちゃんとあやまて、わけをはなしたらよかった。

授業の感想 (授業で思ったことや感じたことを自由に書こう。)

この話を聞いて、すれちがいで関係がくずれてしまったこともあるんだと思った。特にくんとくんの意見で、すれちがいを感じた。私はこれから友達と仲良くしたいから、このよし子さんとえり子さんの話で学んだことをちゃんと生かして、くんとくんとあやまて、相手をもっと思うことを大切にしていきたい。

【資料 7】学習シート④

(5) 友だちの意見を聞いて、自分の考えを見つめ直す児童 A (第 5~6 時)

第 5 時では、物語資料『最後のクラブ決め』を用いて授業を行った。『最後のクラブ決め』では、学習

シートに心情線を載せ、最初の自分の考えと友だちの意見を聞いた後との考えの変化を比較できるように工夫した。はじめ、児童たちは困った表情をしていたが、もしも自分がその子の立場であったならばどちらを選択するのかを考えていた。その後、どちらを選択したのか、また選択した理由について全体の場で発表した。発表を聞いて、再度自分であったならばどちらを選択するのかを考えた。児童の中には、心情線の位置が変わっていた児童や変わっていない児童。また、クラブ自体変わった児童がいて、様々であった。学級全体でも友だちの意見や考えを聞くとする雰囲気が出始めているように感じた。

児童 A は、授業内ではこのように発言している【資料 8】。

T : よし子さんだったら、どっちのクラブに入るかな？  
児童 A : 音楽クラブ。E 君に付け足して、エリさんに頼まれたし、5 年生のときのクラブ活動が楽しかったから。  
T : E 君に付け足すって言い方がいいね。頼まれたし、楽しかったからね。

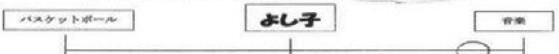
【資料 8】授業記録②

発言の中にも友だちの意見や考えを用いて自分の意見を伝えようとしていた。また、学習シートでは、選択したクラブは最初と同じであったが、心情線の位置が変化していた。授業の感想では、「初めは音楽クラブのほうにしたけど、うらぎれない・約束したという意見をきいて、バスケットにしようかまよった。でも、理由を伝えるという意見をきいて、やっぱり音楽クラブにしようと思った」と記述している。他者の意見をきいて、自分の考えを見つめ直したうえで、自分なりの考えをもつことができていると感じた【資料 9】。

～最後のクラブ決め～

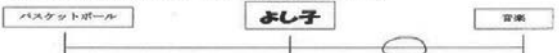
あなたがよし子だったら、どちらのクラブに入りますか？

【バスケットボールクラブ、音楽クラブ】



エリさんにたのまれたし、5年生のときのクラブ活動が楽しかったからまた音楽クラブにしようかな。

友だちの意見を聞いて、もう一度考えてみよう。



授業の感想 (授業で思ったことや感じたことを自由に書こう。)

今回の話を聞いて、自分だったらと考えてみて、とてもよかった。初めは音楽クラブのほうにしたけど、うらぎれない・約束したという意見をきいてバスケットにしようかまよった。でも理由を伝えるという意見をきいて、やっぱり音楽クラブにしようと思った。

【資料 9】学習シート⑤

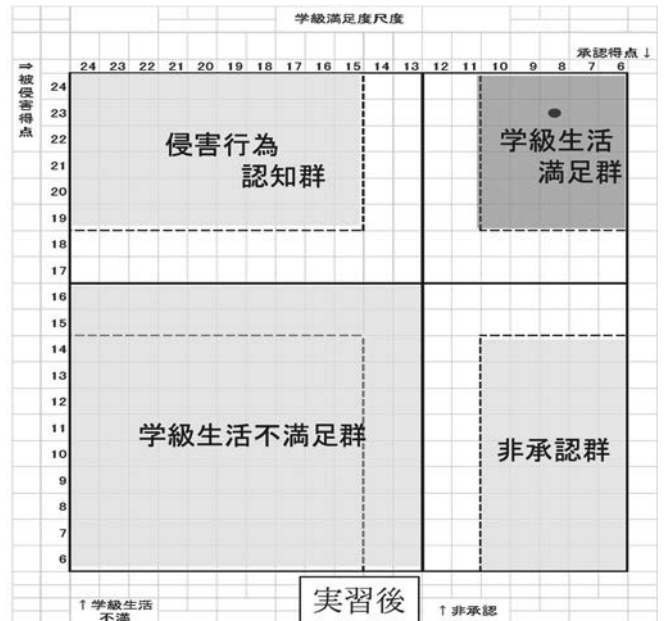
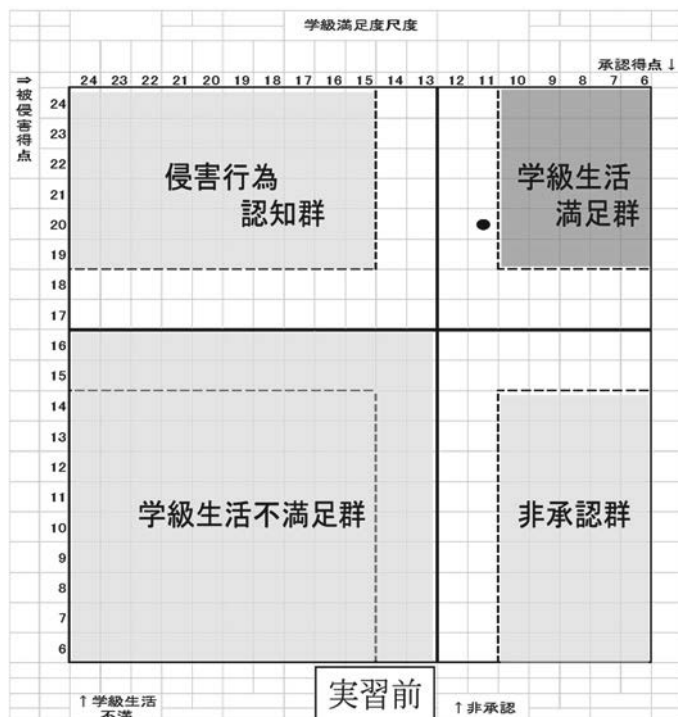
(6) 指導全体を通して

指導前後の児童 A の姿や授業での様子、学習シートの記述内容から、自分の個性について理解を深め、たくさんの自分の良いところを発見することで「自

己肯定感の向上」や他者から自分の良いところや意見を認めてもらうことで「所属意識の向上」、他者の良いところを発見することや他者の意見や考えを認めることで「個性を認め、支え合うことができる」児童を育成できると児童の様子から感じ取れた。

児童Aの実習前と実習後に行ったアンケートにも変化が見られた【資料10】。実習前では、承認感の高さを示す被侵害得点が20点に対し、実習後には23点に上昇している。アンケート項目1番の「運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味でクラスの人から認められることがありますか。」という質問に対し、実習前は「あまりない」と答えていたに対し、実習後は「よくある」と答えた。また、所属意識の高さを示す承認得点は、実習前が11点に対し、実習後は8点になり、所属意識が高まったと言えるだろう。アンケート項目13番の「あなたの休み時間などに、ひとりぼっちでいることがありますか。」という質問に対し、実習前は「よくある」と答えていたに対し、実習後は「あまりない」と答えた。さらに、「あなたは、クラスの人から好かれていると思いますか。」という質問に対し、実習前は「少しそう思う」と答えていたが、実習後は「よく思う」と答え、少し変化が見られた。

以上を踏まえ、児童の実態や興味・関心を把握し、それに応じた教材を選び、授業を行っていくことで自分になかなか自信をもつことができなくとも「自己肯定感」を高め、「自分にはよいところがたくさんあるんだ」「友だちから認められているんだ」などという自分と他者の個性を認め合う姿につながる事が分かった。



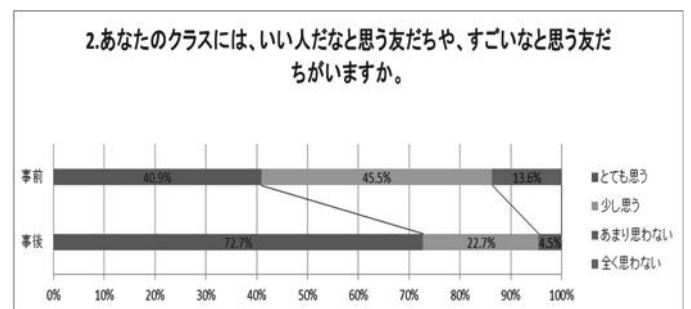
【資料10】児童Aの実習前と実習後の「学級満足度尺度」

## 8 実習Ⅰ、Ⅱの成果と課題（成果を○、課題を▲で示す。）

### （1）認め合い活動を取り入れた道徳教育

#### ①自己肯定感を高めるために

○第1時と2時での授業感想に「自分の良いところに気づくことができ嬉しかった」や「友だちが自分のことをよく見てくれていて安心した」などの記述があった。また、授業後に行われた学級会でも学級の良いところとして、自分の良いところをたくさん言ってくれるところという意見が出た【資料11】。



【資料11】アンケート結果①

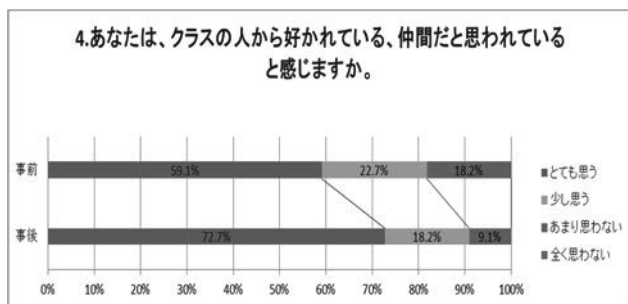
▲自己肯定感を高める活動を授業時間内だけで完結してしまっただけで、授業で出た自分や友だちのよいところを日常生活でも発見できるような活動を行い、良いところを発見することを習慣化できるような手立てを行っていく必要があった。

#### ②所属意識を高めるために

○児童の所属意識を高めるために、他者から自分の個性を認められていると実感できる活動を行った。そのため、実習前後にアンケートでは、90%以上の児童がクラスの人から好かれていると実感できると答えた【資料12】。他者から良いところを見つけてもらうことは所属意識



を高めることには有効であるとわかった。



【資料 12】アンケート結果②

▲自分のできることを学級で生かしていくという部分が足りないように感じた。授業内で児童の気持ちを高めることができたが、それを実際に行動に移すことができるよう、工夫する必要があった。

## (2) 絵本や物語文を使った教材の工夫

○絵本や物語文を教材として使用していくことで、児童が全体場で発言しやすくなるのだと感じた。実践学級の児童たちは自己の心情を人前で発表することに苦手意識をもっている。しかし、絵本や物語の登場人物を通すことで、心情を発表することができた。第3時以降の授業では、ほとんどの児童が発言することができた。

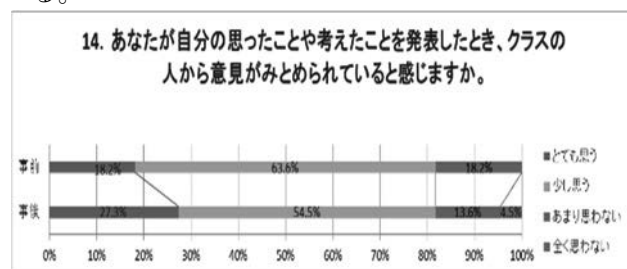
▲児童が絵本や物語文を授業内での資料として認識してしまい、実際の問題として認識することが難しいと感じた。学習シートの感想にも「実際に起こったことはないが、もしも起こったならば迷うと思う」と記述していたり、授業後での会話では「ほんとうにこんな場面があるのかな」と言った。児童が資料に対して、考える必要性を感じることができるよう、日常生活に関わりの深い教材を選んでいくことが大切だと考える。

## (3) 他者の考えを聞く場の設定

○他者の意見を聞く場を設定することにより、他者の意見を認め、そのうえで自分の考えをもてるようにすることを目的にジレンマ教育を行った。児童Aの授業内での発言や学習シートの感想では、他者の考えをもとに自分の考えをもつことができていた。よって、他者の考えを認めるために、考えを聞く場の設定として、ジレンマ教育を取り入れることは有効であった。

▲他者の考えを聞く場の設定として、ジレンマ教育を取り入れ、他者の意見を認めるだけではなく、自分も他者から考えを認められているという実感をもてるようにした。しかし、実習前と実習後で自分の意見が認められていると感じた児童の割合に変化がほとんどなかった【資料13】。今回、意見や考えを認め合う機会を学級全体での場でしか設定しなかった。いきなり全

体の場で発表するのではなく、ペアやグループなどの段階を踏んでから行う必要があると考える。

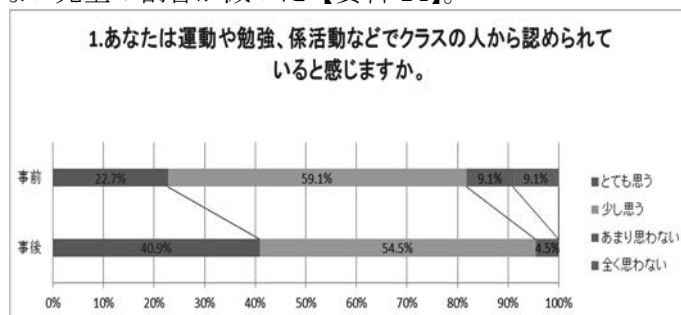


【資料 13】アンケート結果③

## VII 研究のまとめ

### 1 成果

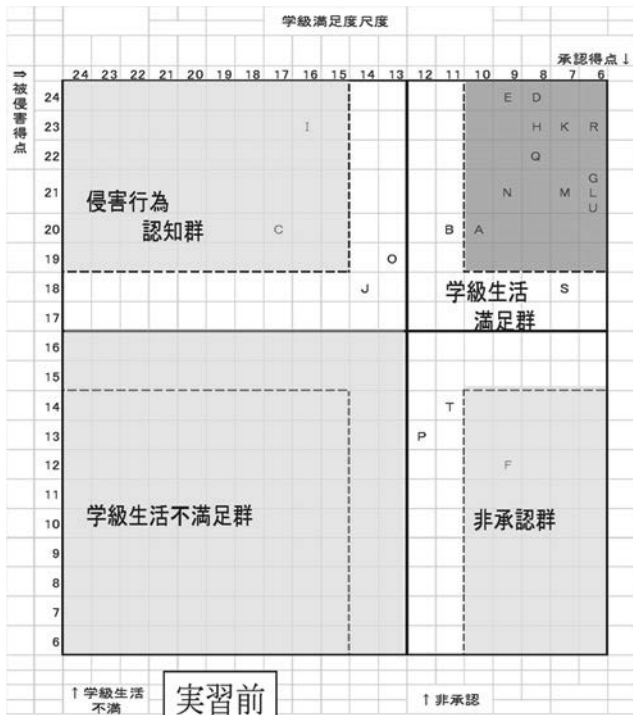
今回、他者の目を意識してしまい、なかなか自分に自信をもつことができず、自分の意見を発表することができず、他者から認められていると実感をもつことができていない児童が少ない学級で実習を行った。児童の自己肯定感を高めるため、友だちから自分のよいところを教えてもらうという活動を行うとともに、友だちのよいところにも気づけるようにした。また、所属意識を高めるため、「友だちから自分の考えが認められている」という実感を得られるよう、ジレンマ教育を行った。アンケート項目1番では、実習前はクラスの人から認められていると全く実感できない児童やあまり思わない児童がいたが、実習後では実感できる児童の割合が増え、実感できない児童の割合が減った【資料14】。



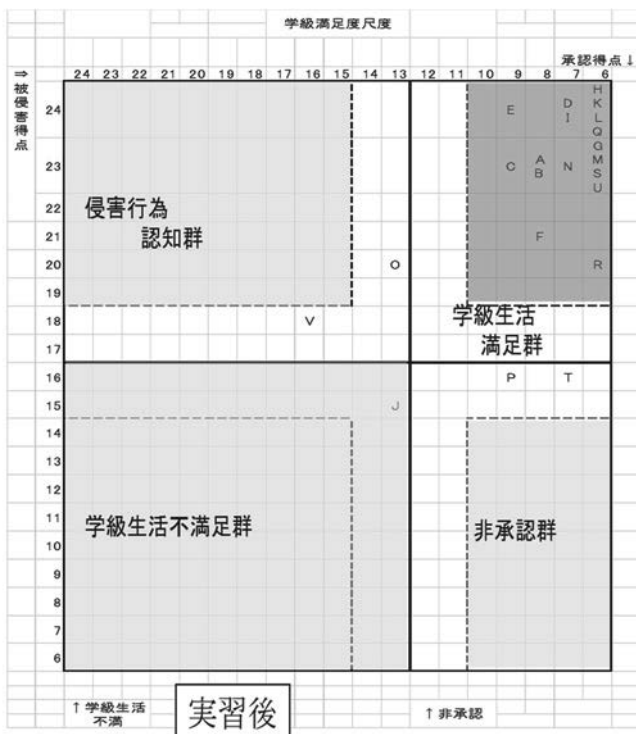
【資料 14】アンケート結果④

実習中に行われた学級会では、学級の良いところとして「友だちに思いやりをもつことができる」や「授業での発言が増えた」などがあげられていた。児童たちも友だちから認められているという実感をもつことができ、自信をもって自分の意見や考えを伝えることができるようになったと考える。

また、学級に対しての満足度を示す「学級満足度尺度」では、多くの児童が学級生活満足群に位置している。実習前には侵害行為認知群には2人、非承認群には1人いたが、実習後にはそれぞれ0人になっている【資料15】。



実習前



実習後

【資料 15】学級全体の实習前と実習後の「学級満足度尺度」

非承認群から学級生活満足群に移動した児童の感想には、「友だちから良いところを教えてもらえてうれしかった」という記述もあった。学級の雰囲気も実習前では、仲が良い子同士でしか話していなかったが、実習後では全員が分け隔てなく会話をしている様子であった。

以上のように、児童の自己肯定感と所属意識を高めるために、認め合い活動を道徳の授業で取り入れることで子ども同士がお互いの個性と認め合い、高

め合う学級をつくっていくことができると学ぶことができた。

## 2 課題

実習 I では、授業の内容が道徳よりも特別活動の内容に近くになってしまったことが挙げられる。特別活動になってしまわないためにも、教師がこの授業を通してどのようなことを学んで成長してもらいたいのかを明確にして、授業の終わりにその時間を作る必要がある。

実習 II では、所属意識を高めるため、ジレンマ教育を行った。ジレンマ教育を行う上で、まずは自分の意見や考えを明確もっている必要がある。しかし、まだまだ自分の考えをもつことができない児童がいたにもかかわらず、話し合い活動を行ってしまった。授業内で、個別の支援を行っていき、児童ひとり一人が自分の考えを明確にでき、それを相手に伝えることができるよう、支援を行っていく必要があった。今後は、個別に対する支援方法についてどのように進めるのかを考え、指導力向上に努め、「学び続ける教師」でありたい。

### 【主な引用・参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』(2015)
- ・行安茂著『道徳教育の理論と実践』(教育開発研究所 2009)
- ・若菜秀彦著『学級づくりがわかる本 対話からはじまる学級経営』(明石書店 2006)
- ・山極隆・無藤隆著『ゆとりある教育活動、基礎・基本と個性』(ぎょうせい 1999)
- ・北島貞一著『自己有用感・生きる力の中核-』(田研出版 1999)
- ・全生研常任委員会著『学級づくり入門』(明示図書 1990)
- ・松澤修『自他共に認め合い、高め合える学級づくり』(群馬教育センター 2012)
- ・河村茂雄『学級集団づくりのゼロ段階—学級経営力を高める Q-U 式学級集団づくり入門』(図書文化 2012)
- ・沼田洋子『道徳自作資料&指導案 No.3』(明示図書 2011)
- ・荒木紀幸『モラルジレンマ教材とする白熱討論の道徳授業—小学校編』(明示図書 2012)
- ・ヨシタケシンスケ『ぼくのニセモノをつくるには』(ブロンズ新社 2014)

### 【付記】

連携協力校の校長先生をはじめ、多くの先生方の温かいご指導・ご助言のおかげで有意義な実習を行うことができたと感じております。お世話になったすべての先生方に、心から感謝を申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーター活動、教師力向上実習 I、II、終了報告書の作成において、最後まで熱心にご指導をくださった杉浦宏幸先生をはじめ、温かくご指導・ご助言して下さった教職大学院の先生方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。